

第 8 回次世代シンポジウム運営委員会（旧若手教員会議）議事録・報告書

日 時 令和 2 年 9 月 12 日（土） 13 時 00 分～15 時 00 分
場 所 Zoom によるオンライン開催
参加者 薬系大学に所属する准教授、講師、助教、助手
全体議長 小西英之（静岡県立大学、第 19 回次世代シンポ実行委員長）
記 録 稲井誠（静岡県立大学、第 19 回次世代シンポ実行委員）

出席者

- A グループ：樽井敦（摂南大薬）、猪熊翼（徳島大院薬）、勝山彬（北大院薬）、高橋万紀（星薬科大）、
西山義剛（名大院創薬）
B グループ：石田寛明（昭和薬大）、高山亜紀（富山大院薬）、長澤翔太（東北大院薬）、
浜田翔平（京都薬大）、森本浩之（九大院薬）
C グループ：井川貴詞（阪大院薬）、久次米永子（松山大薬）、坂井健男（名城大薬）、
中島誠也（千葉大院薬）、福田隼（長崎大院医歯薬）
D グループ：伊藤寛晃（東大院薬）、大多和正樹（北里大薬）、杉本健士（富山大院薬）、
松本健司（徳島文理大薬）、森本功治（立命館大薬）
E グループ：太田浩一朗（東京薬大）、沖津貴志（神戸薬大）、花屋賢悟（慶應大薬）、林賢（明治薬大）
F グループ：大西英博（北大院薬）、隅田有人（金沢大院薬）、瀧川紘（京大院薬）、
山本耕介（長崎大院医歯薬）

合計 28 名（敬称略、下線：取りまとめ役）

議題『薬学の若手研究者の今後、あるべき姿と将来、薬学部教育・研究・危機管理について』

方法：Zoom のブレイクアウトルーム機能を利用して参加者を上述の 6 グループに分け、グループ内での討議を行い、その内容を取りまとめ役（下線）に発表して頂いた。

具体的な討論内容

未曾有の感染症拡大に起因する困難な情勢のもとで、薬学部の中でも有機化学的専門性を持つ若手教員がどのようにしてこれからの学生の教育や研究を行っていくべきか、また薬学人として次世代の人材育成や社会のためにどのような点で貢献できるかを喫緊に考える必要があるのではないかとと思われる。そこで、各大学において COVID-19 禍が与えている影響について情報を共有すると共に、若手教員が今後の教育・研究の邁進のために必要と考えられる環境整備、私達よりも若い世代の薬学人材育成について議論し下記について取りまとめた。

1) 現在、薬学部における教育と研究で満足している点、不満な点、心配な点

●満足している点

- 国家試験の受験を前提に入学することから、低学年時から学習意欲が高く、進級基準が比較的高いため研究室配属ではある程度の学力を備えた学生が担保されている点。
- 比較的小さなコミュニティのため人間関係を構築しやすく、非常にレベルの高い研究者が数多く在籍しており良い刺激を受けられる点。

●不満な点

- 6年制への移行により、実務実習を経験し薬学の知識をこれまで以上に備えた学生が大学院へ進学するものと期待したが、実際は進学率が低下し、4年制時代と比べ研究テーマの継続性に難がある。
- コアカリで有機化学の範囲が縮小傾向であり、研究に重要な講義が行いにくい環境となりつつある。コアカリを気にせずに学部の期間で基礎科目をもっと踏み込んで学ぶ事ができる環境になってほしい。

●心配な点

- 研究に触れる時間の減少故に、学生が研究に興味を持てなくなっているのではないかと思います。大学院に進んだ後の将来への想像が難しいため、それが大学院生の減少につながっている。
- 他学部より専門性に欠けるのではないかと感じる。薬学独自の研究（学際領域）を充実させていかないと、理工系/農学系との差別が難しくなると感じる。いかに院生を確保していくかも大きなポイント。

2) 長期的に薬学部で教育・研究に邁進するためにどのような環境整備が必要か？

- 将来的にポジションそのものがなくなる可能性を念頭に置いて、薬学の教育・研究の重要性（なぜ他の学問ではなく、「薬学」という学問が必要なのか？）を絶えず世間に示していくことが必要。
- 病院薬局実習の時間を減らして、もっと研究に当てる時間を増やすようなシステムになってほしい。薬局病院の指導薬剤師にも、実習の効率化を考えて欲しい。

3) 4年制学部出身者が薬学部でポジションをとるのに不利であると感じることがあるか？

- 現状ではそうは思わない。事実、周囲の薬学若手教員は4年制薬学部出身、薬学部出身でない方もいる。6年制薬学部出身の大学教員は現状では希少。
- 薬剤師資格は、実務実習を含めた薬学教育を修了した証であり、ポジションを得るにあたりアドバンテージと考えなければならない。
-

4) この COVID-19 禍で薬学教育・研究者は社会に対して何ができるか、何をすべきか？

- 対面講義をすすめることができるように全国の国公立大学がマスコミと対話し、大学名の公表を自粛してもらうように交渉する必要がある。
- マスコミやネットのあやしい情報、風評などに惑わされずに、蓄積された科学的に正しいデータと現況から導かれる「最適解」を提示し続けること。安易な治療薬・ワクチン等の承認や、科学的根拠が希薄な対策に対して警鐘を鳴らし続けること。

5)講義や実習の対面での実施が困難になっている現在の COVID-19 禍のもとで、学部や大学院の教育・研究において有効な手段のアイデア

- 研究に関しては、基本的な感染症対策 (3 密を避ける、手洗い消毒の徹底、マスク着用など)を実施の上で、コロナ前とほぼ同レベルの活動ができるようになってきた。
- 新型コロナに対する過度な対応は学生や教員を疲弊させるだけでよいことは何もない。一定のルールに従えば、後期から実習や講義を対面で行うことに問題はないと考える。
- 学生実習の基本操作のビデオや問題集を薬学部全体で作成し、それを各大学共通で使えるようにすると良い。大学横断で作成した「問題バンク」のようなものを活用し、共通した部分は教育システムを統一にできれば良い。質疑応答や細かい部分だけ、各大学で授業すれば良いのではないかと考える。

結語

COVID-19 禍は、大学での研究教育に対して多大な影響を与えており、オンライン講義や少人数講義など各大学が様々な教育法を試みていることが明らかとなった。COVID-19 禍での薬学教育に対する新たなアイデアも活発な提案や討論が行われ、お互いの状況確認に止まらない生産的な話し合いとなった。